



N P O 法 人
ほっかいどう学
推進フォーラム



理事長

新保 元康 (しんぼ もとやす)

1958年小樽市出身。82年北海道教育大学札幌分校卒業。小学校勤務とともに、北海道社会科教育連盟や北海道雪プロジェクト等に長年参画し、地域教材を多数開発。また文部科学省の情報化推進事業の各種委員も歴任。2019年屯田小学校長を定年退職。8月からNPO理事長として活動を本格化。

世界につながるオホーツクの 魅力とそれを支えるもの

NPO法人ほっかいどう学推進フォーラム

当法人の中核的な活動の一つは北海道各地区で開催する「ほっかいどう学連続セミナー」です。この第2回を令和2年2月22日網走市にて開催しました。テーマは「オホーツクの魅力再発見～世界につながるオホーツクの魅力とそれを支えるもの～」。当日は約100名の参加者を迎え、来賓に谷村昌史氏（国土交通省北海道局参事官）、伊賀治康氏（北海道教育庁オホーツク教育局局長）を迎え、オホーツクの魅力テーマとした4つのセッションとパネルディスカッションが行われました。前号に続き、同セミナーの開催概要を報告します。（文中の肩書は全て開催当時のものです）

セッション1：

流水の魅力語りつくす！なぜ、世界から流水が注目されるのか

田口 桂 氏（オホーツク流水館代表取締役社長）

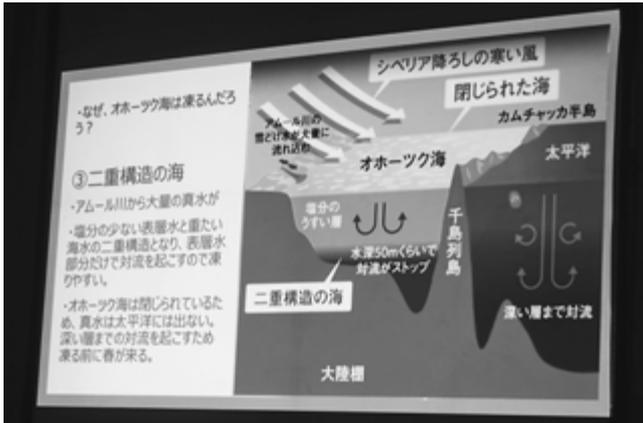


流水の魅力の一つは圧倒的な自然美です。知床岬とともに約50kmの海が流水に埋め尽くされる景観はオホーツク海ならではの。「流水観光砕氷船 おーら」乗船の際には、是非、ホームページやライブカメラを活用して絶景を堪能し

てください。2つ目は「自然」。そもそも、なぜ、オホーツク海で流水が見られるのか、それは、シベリア降ろしと言われる北風、オホーツク海が閉じられた海であ

るという地理的要因、アムール川から淡水が大量に流れ込む、という3つ偶然が重なったためです。3つ目は「海洋資源」。なぜ、オホーツク海の海洋資源は豊富なのか。これは、流水が食物連鎖の基礎となる植物プランクトンを大増殖させることや、凍る際に海洋のダイナミックな循環を生み出すためです。

このように様々な恵みをもたらす流水ですが、地球温暖化によって減少傾向にあります。健康な地球を未来に引き継いでいかなければなりません。



セッション2：

GPSガイダンスシステムで変わるオホーツクの農業 ～世界と闘う日本の農業の今～

富永 雄一 氏（農事組合法人網走農場）

網走農場は昭和30年代頃から農家が共同で機械を購入する営農集団方式をとっています。主な作物は、ばれいしょ、麦類、てんさいなどで、東京ドーム72個分ほどの広大な耕作面積をGPSガイダンスシステムを活用しながら、僅か11名で作業しています。農業の現状として、後継者不足、人手不足、気象変動、収入減少などの問題がありますが、人手不足については、GPSガイダンスシステムの活用により、負担軽減、作業の効率化に繋がっています。



一方で、システムに頼りすぎることには問題があるとも感じています。今後はGPSガイダンス同士の連携や、

自動運転化、人工衛星を活用した圃場管理などの展望があります。最後に、今後の農業の在り方としては、安全安心な生産物を消費者に届けること、国内自給率の向上と労働力の確保、そして、子どもたちに農業の楽しさを知ってもらうことが重要であると考えています。



セッション3：

世界初のアイスブームとは何か ～サロマ湖のホタテを守る技術の秘密～

佐伯 浩 氏（一般社団法人寒地港湾技術研究センター代表理事会長）

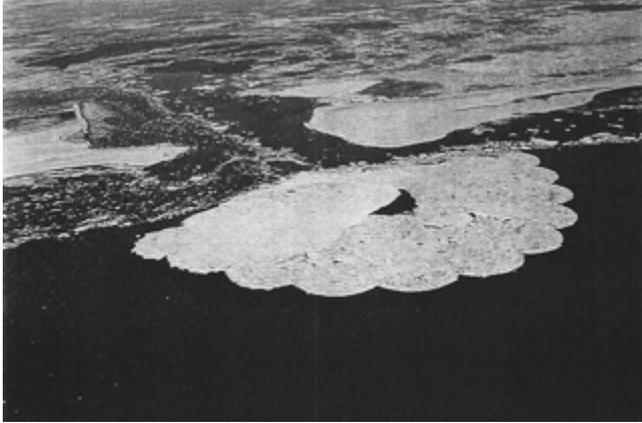
流水は恵みをもたらす一方で、様々な被害も引き起こします。サロマ湖は元々ホタテの生育には向かない水質でしたが、昭和4年に現湖口の開削を機に海洋環境が一変しました。その結果、サロマ湖はホタテの稚貝の供給地となり、非常に豊かな漁場となりました。



ところが、昭和49年に流水が侵入し、養殖施設に甚大な被害をもたらしました。その後も流水が来るたびに様々な被害が生じたことから、流水の侵入を防止、制御する技術として「アイスブーム」が開発されました。アイスブームは流速の違いによって型が異なり、流速の遅い場所にはロープに浮体を取り付けた一般型を、流速の早い場所には一般型の下部にネットを取り付けた特殊型を使って流水の侵入を防いでいます。開

NPO法人ほっかいどう学推進フォーラム

発に至るまでは、安全性や景観上の配慮などの条件のもとで実験を重ねてきましたが、こうした技術によってサロマ湖のホタテが守られています。



セッション4：

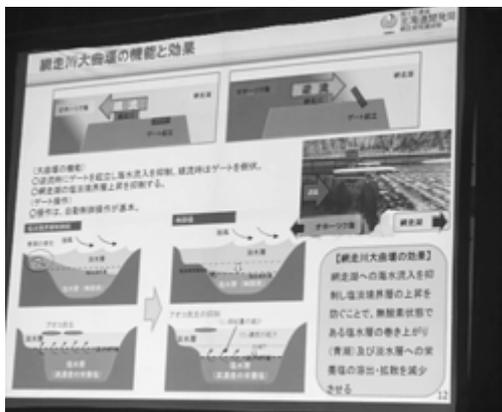
網走湖の汽水環境を守る

高橋 一浩 氏（北海道開発局網走開発建設部次長）

網走湖は道内8番目の広さを有する汽水湖で、大きな特徴は湖底が無酸素状態という点です。そのため、強風で波が発生すると無酸素の塩水層が上昇し、青潮が発生するという問題、また、高度な栄養塩類が蓄積し塩水層に吸収されることで、アオコが発生するという問題があります。



そこで昭和62年から水環境改善に向けた技術的な検討が開始され、平成16年には総合的な水質改善施策として清流ルネッサンスⅡを策定し、具体的な数値目標を定めて技術的な検討を進めています。その一つが平



成29年から本格運用している網走川大曲堰です。ゲートにより海水流入を抑制し、網走湖の塩淡水境界層の上昇を防ぐ働きを担っており、観測データからは青潮発生頻度の減少が確認されています。引き続き、網走湖の水質改善に向けて、関係機関との情報共有、取組を連携し、データ収集、意見交換を行っていきたいと考えています。

パネルディスカッション

「まだまだ眠るオホーツクの宝 子どもに教えるのはこれだ」

続くパネルディスカッションは、セッション登壇者に加え山田浩氏（中湧別小学校校長）を迎えて進められました。参加者（教員）からは、「当たり前すぎて気が付いていなかった地元の魅力を再発見できた」という声上がり、山田氏からは、「建設業界の方も（教育に）協力したいという思いを持っていることを知ることができた」といった意見が出されました。一方で、参加者（建設関係者）からは、「農業、水産、建設に対しては保護者世代に良いイメージがない。親御さんと一緒に学べる機会があれば、私たちの仕事に対する理解も深まるのではないか」といった声や、「小学校に（建設関係の）見学会を通知しても関心をもってもらえないことが多い」といった声も上がり、ディスカッションを通じて、オホーツクの魅力を未来に継承する上での課題が示され、業種・業界の垣根を超えた連携のあり方を模索する機会となりました。

おわりに

コロナ禍の中、直前まで開催が危ぶまれましたが、感染予防対策を徹底した上での開催を決断しました。結果、100名近くの参加者の皆様とオホーツクの自然、産業の魅力と、それらを支える技術を共有することができました。参加者ならびに関係者の皆様のご協力に感謝申し上げます。コロナ後の社会はまだ霧の中がありますが、危機の中の光を見出し、ほっかいどう学を前進させていきたいと思えます。

*国土交通省北海道開発局が中心となって進めている「ほっかいどう学」については、以下に情報が掲載されています。

<https://www.hkd.mlit.go.jp/ky/ki/keikaku/splaat000000ozs0.html>